

文明の行き着くところ ~Destination of Civilization~



ガラス産業連合会運営・技術委員長
岡本硝子株式会社上級執行役員商品開発本部長

新井 敦

Arai Atsushi

◇便利すぎる文明社会とその弊害としての新ビジネス

「文明」とは何か。辞書には「人知がもたらした技術的・物質的所産」とある。人知はどのような技術的・物質的所産をもたらしたのか。仮に、人の「移動」を例にとりて考えてみる。人は自転車を発明し、自動車を発明し、鉄道を飛行機を発明した。エスカレーターもエレベーターも動く歩道も産み出した。お蔭でほとんど歩かなくて済むようになった。歩くのは面倒だし、時間もかかるし、疲れるし、夏なら汗まみれになるし、本当にいいものを発明してくれた。飛行機なんて椅子に座っているだけで、外国にまで連れて行ってくれる。何と便利な世の中になったことか。では「便利」とは何か。辞書には「都合のよいこと。役に立って具合のよいこと」とある。これは言い替えれば、人にとって「楽」なことではないか。人は同じことをするのなら、なるべくそれに費やす労力や時間が少なくて済む「楽」な方を選ぶ。人は、楽をするために、楽に何かをするために、怠けるために、発明というものをしてきたのではないか。それらの発明の集合体が文明社会と呼ばれているものだろう。とても便利で楽な社会になった。

ところが、便利な移動手段に取り囲まれてほとんど歩く必要がなくなった人々は、健康のためにわざわざジョギングやウォーキングをしたり、スポーツジムに通ったりするようになった。エレベーターをわざと避けて階段を上る人もいる。つまり、便利に楽になりすぎたのではないか。しかし、そこにまた新たな発明やビジネスが生まれる。それは楽に筋肉が鍛えられるマシンであったり、楽に体脂肪が燃やせるトレーニングウェアであったりする。そして、やせ細ってしまった筋肉を増強するための、スカスカになってしまった骨を再生するための、醜く突き出てしまった下腹を引っ込めるためのサプリメントが、三度の食事よりも大切になってしまう世の中がすぐ目の前に迫っている。何かおかしくはないか。そのような文明社会は本当に幸せな社会だろうか。

製造業に携わる我々は何らかの生産活動をして収入を得て生活をしている。従って、人

が欲しいものを生産して売らなければならない。どういうものを生産すれば売れるのか。それは人を楽にしてあげるものである。短い時間でわずかな労力でよりたくさんの欲求を満たすことができるものである。「いかに楽をさせてあげるか」がキーワードである。だから、自転車も自動車も発明したし、楽に筋肉が鍛えられるマシンも楽に体脂肪が燃やせるトレーニングウェアも発明して生産すれば売れるのである。必要な栄養が楽に摂れるサプリメントも売れる。食物繊維だタンパク質だ炭水化物だと食材や献立に頭を悩ませる必要はない。サプリメント錠剤を十種類も飲めば、はい朝食も昼食も終わり。何て楽ちんだらう。栄養価のバランスがとれていて、おいしくて、しかもお腹がいっぱいになったような気にさせてくれるサプリメントなんていうのもそのうちに発売されるのだらう。サプリメントと言うよりはもう主食だ。おっと、糖尿病と高血圧と高脂血症と痛風の薬も忘れずに。ほんとにもうお腹いっぱいだ。そう言えば、生活習慣病などというものは、社会が便利に楽になりすぎたことによってもたらされた弊害の最たるものではないか。そして、人間自らが創造した生活習慣病の周辺には、また新しい医療や新しいビジネスがウヨウヨと群がるのである。まさに自らの身体と健康を犠牲して、新たなビジネスを立ち上げているのだ。そうして、人間は罪の意識も性懲りもなく、もっともっと人を楽にしてあげるものを発明する。それらを楽に生産するための設備や工程をも発明・開発する。人を楽にさせ怠けさせるものを開発して生産していかなければ、収入が得られず生きていけないのである。それで人はどんどん楽になるものを発明して生産して、ロボットや機械が大忙しに働き回ってくれる代わりに、人はどんどん楽になってどんどん怠けものになっていく。便利すぎる世の中になっていく。そしてまた新たな弊害が生まれ、続いてそこにまた新たなビジネスが生まれる。これが我々の求める幸せな文明社会だらうか。そんな奇妙な文明社会を築くために、我々は開発活動に生産活動に日夜心血を注いでいるのであろうか。

◇医療の弊害～医療が目指す理想像とは

もう一つ、例として医療について考えてみよう。ある日突然、未知の病が流行って人々の多くが死んでしまった。でも多種多様な DNA の中にはその病原菌やウイルスやらに対して抵抗力を有するものもあって、その DNA を持つ人々は幸運にも生き延びることができた。人類は絶滅せずに済んだのだ。強い DNA が生き残り、強い人類が再び地球上に繁栄していくのである。これを淘汰と言う。何億年もの間、地球上で続いてきた種の存続の仕組みである。しかし、医療は淘汰のシステムそのものを破壊してしまう可能性を持っている。特効薬や新しい医療技術が発明されることで全員が生き残ってしまうからである。環境に適した DNA のみが生き残るのではなく、弱いのも強いのもみんな生き残ってしまうのである。個人個人は死にたくないし、みんなが長生きできるのだからそれはそれで素晴らしいことだらう。みんなが医療に感謝する。私だって自分が家族が病気などで死に直面すれば、淘汰されるよりも特効薬や新しい医療技術にすぎる。しかし、何千年、何

万年もの長い目で見たときに、人類にとって、みんながみんな生き残ってしまうことは本当に良いことだろうか。想像してみよう。百歳を超えても誰も死なない世の中を。本人の意志に関係なく延命させられてしまう世の中は既に現実となっているではないか。これが我々の求める幸せな文明社会だろうか。そんなSFホラー映画のような文明社会を築くために、我々は開発活動に生産活動に日夜心血を注いでいるのだろうか。医療が目指す究極の目標とは、理想像とはどんなものか。生命を弄んだあげくに、クローンに労働させて人間は遊びほうけている世界、金太郎飴のような頭脳明晰な天才人間ばかりが繁栄している世界、百歳を超えた老人ばかりが徘徊している世界などではないはずだ。

◇便利すぎる文明社会が犠牲にしてきたもの

人は元来怠けものである。常に楽な方、簡単な方を選びたがり、アダムとイブがリングゴを食べてしまってからというもの、人知を総動員して発明を繰り返し、ロボットや機械をフルに働かせて自分たちはどんどん楽になってどんどん怠けものになってきた。限りない欲望を次から次へと実現してきた。発明が奴隷を機械に替えたのだ。しかも、地球というかけがえのない我が家を犠牲にしてである。オゾン層に穴を開け、地球の平均温度と海面を上昇させ、貴重な化石燃料を湯水のように使い、至る所から資源を掘り出し、これでもかこれでもかとかかけがえのない地球を痛めつけそして汚してきた。またある時は、公害で我々の仲間をも傷付け苦しめてきた。原子力を手に入れ、最悪の大量殺人兵器を作り、発電所を作り、しかし結局はどちらも手に余り、後者ではつい最近も津波という大自然の力の前にひれ伏したばかりである。神に自然に畏怖の念を抱かなければいけない。もうこれ以上、楽をしようとしてはいけない、怠けようとしてはいけない、我儘が贅沢が過ぎてはいけない。度が過ぎてはいけない。これ以上、地球を痛めつけ汚してはいけない。物質は満たされたか。いや、地球というかけがえのない我が家はもうボロボロだ。そして心は満たされたか。今も世界の各地では争いが絶えないではないか。貧富の格差はどうか。人々はみな幸せか。我々の求める理想の文明社会とはどんなものか。

と、ここまで書いて、あまりに極論か、と一旦ペンを置いた。確かに、人知は例えば飛行機やロケットを発明し、鳥のように空を飛びたい、月に行ってみたいという純粋な人類の夢を憧れを叶えたことも事実である。ジョギングやウォーキングやスポーツジムでの運動も現代社会においてはそれ自体が楽しみであり、ストレス発散の場や出会いの場であったりして、我々の生活に「張り」を与えてくれているのも事実だろう。医療についても、安心・安全、介護、自立支援等の分野は、大いに促進されるべきであろうし、健全な健康な生活が送れること、健康寿命を延ばしより長く働き続けられることを目指す医療は大歓迎である。しかし、どうだろう、前述のような一面もやはり否めないのではないか。人類の長い歴史の中で、人は人知の限りを尽くして、かけがえのない地球を犠牲にし、生態系においても人間社会においても弱者を食いものにし、いかに楽をするか、いかに怠けるか

を追求してきたその結果がこの便利な、いや便利すぎる文明社会である、という一面である。「文明」とは、人間が追求し実現してきた「楽」と「怠惰」と「我欲」の歴史であるという一面である。

◇理想の文明社会を求めて

とは言え現実を見れば、とにかく我々は日々収入を得て生活をしていかなければならない、家族を養い共に生きていかななくてはならない。では、我々は何を生産して収入を得て生きていけばよいのか。人をこれ以上楽にさせるものでなく、怠けさせるものでもなく、地球にやさしくむしろ地球の再生を促すものであり、それでいて人が欲しがらるもの、人が喜ぶもの、世界人類が地球上で平和に幸せに暮らしていけるようなものでなければならぬ。地球上のすべての人々が物心両面で幸せになるようなものでなければならぬ。いや、本当は人類だけではなく、地球上のすべての生物が平和に幸せに生きていけるものでなければいけないのかもしれない。

我々の文明はどこに行き着くのだろうか。我々はどこまで楽になれば気が済むのだろうか。その開発は本当に必要なのだろうか。便利なことは本当にいいことなのだろうか。我々は本当は何をどこまで望んでいるのだろうか。日本国の再生か。億万長者か。名声か。不老不死か。それとも物々交換の自給自足の原始時代に戻るのが正しいのだろうか。理想の文明とはどんなものか。理想の文明社会を目指して、我々は何をすべきなのか。何をすべきか。何をすべきか。

残念ながら、今、私はこの問いに対する明快な答えを持たない。そもそもリンゴを食べてしまった以上、もはや我々には明快な答えなど出せないのかもしれない。しかし、何とか一歩を踏み出そうとするならば、まずは我々の意識とモラルの問題であると思われる。どこからが我侷で、どこからが贅沢で、どこからが神の領域であるか、という問題である。我々が「倫理」という言葉を使うとき、そこは既に神の領域に近いということを認識すべきである。その開発に成功したとき、この世の中にどんな変化がもたらされるかという結果を、特に負の影響を予め考えておかなければならない。何をすべきかに関しては、例えばであるが、ゼロ・エミッションあるいはマイナス・エミッション、リサイクルの徹底、CO₂の固定化、太陽光発電システムを始めとするクリーンエネルギーの創生、省エネルギー等がキーワードになるような技術開発が主流になっていくようであればならぬだろう。これからの技術開発は地球にやさしくあることが大前提でなければならぬ。さらに地球の再生に貢献することが強く望まれる。

いずれにせよ、我々の子供達、孫達、延々と続く子孫達のために、立派なDNAと美しい豊かな地球を残すために、人類の輝かしい未来を確かなものにするために、「理想の文明とはどんなものか。理想の文明社会を目指して我々は何をすべきなのか。」というこの問いにこそ、全人類の人知を総動員して挑戦すべきであると思うのである。